日本伝統芸能の地位

角井宏

序　　「起源」との関係、万国正義院の評価

I. 日本伝統芸能の範囲とその必然性
ここに言う日本伝統芸能は、能・狂言・文楽・歌舞伎の四芸能である。日本にはこれらの外にも雅楽、神楽、邦楽、吟詠等々様々な古典芸能があるが、現存の、創造性豊かで、完結している伝統芸能は、この四芸能に限られる。

2. 現代文明の閉塞感打開に必要な古典劇
主知主義主導で作られた工業化文明の閉塞性は、近現代劇の力による打開の見通しが立たぬ。そこで、古典劇に期待がかけられているが、西欧には古典劇がない。西欧には戯曲はあるが、身体伝承を継承する伝統がない。ギリシャ劇も常に改作上演されるから、現代劇になる。それ故日本伝統芸能に期待が集まる。

3. 日本伝統芸能の構造と特性
3.1.人間のとらえ方
①自然とのスタンス　自然から出て自然に帰る。(松風、雪:ゴッホのひまわりと水墨画) 回帰願望主役は世界:現代劇は、個人心理中心で、自然は背景でしかない。・主役は個人、自然は対立物
②人間の輪郭 (可能性)　松風・行平・松・風になる多様・多面性:個体単一性
③人間の心と表情　松風は仮面・女形・身体言語:ゴッホは表情で分かる
3.2.劇場と芸(手品)　開放的な芝居小屋 (非プロセニアム舞台)　役と役者を見る幻想
3.3. 語り物(叙事詩)　言葉の二重性、転位、引用(つづれ錦)この変身がドラマ

4・伝統芸能開発の可能性
4.1.人格の多様性・輪郭の拡大　(「別冊谷崎潤一郎」の「お国と五平」)「ある調書の一説—対話」)
4.2.身体による言語 (言葉の身体化、言葉の限界、三谷幸喜「笑いの大学」「別冊谷崎潤一郎」「マイフェアレディ」)

4.3.自然との-体性　（出雲阿国の芝居小屋･近松の籐十郎･竹本義太夫狂言･市川団十郎･井上八千･武原はん）

5. 伝統芸能開発の保護･助成

6. 正しい伝習･観察法

結
①自然との共生。持続可能な世界の発展を目指す(文明の今日的課題)
②父子相伝の身体技(面と女人禁制の制約を越える身体言語)
③近代劇の追求する迫真性とは逆の抽象化様式化により夢幻能開発(現れる能)
④舞と踊りと振り。その美と人間味は、今後も資本主義の閉塞性を破り、世界演劇の追求すべき古典芸能の開発に寄与。